

## LED 照明の普及

大谷 義彦

(日本大学)

「第4のあかり」と期待されて登場した白色 LED であるが、すでに12年余を経過している。日夜、全世界の研究者、メーカーなどが開発に邁進しているにもかかわらず、まだまだ照明用光源としての存在感が薄い。

LED は人が直接見るための輝度としては十分明るく、90年代から表示用として用いられており、現在では駅などの案内板や交通信号機として確実に定着している。しかしながら、LED の光によりものを見ようとする照度としては、光の量が少ないなどのために、なかなか用いにくいところがあるようだ。

LED は LED なるの特長をもった光源ということで、その特長を生かした使い方を考えることが大切であろう。これまでの光源にとらわれすぎた結果として、電球形 LED とか蛍光灯型 LED とかが売られているが、そのようなものを決して主流とすべきではないと思う。

一般の人々は売っているものしか使えないので、新たな試みは不可能に近い。したがって、LED 照明の普及には、照明デザイナーや建築デザイナーが重要な鍵を握っているのではなかろうか。

最近では、そのようなデザイナーの方々により各種実験的な取り組みがなされており、例えば、住宅照明として LED を多用した流山の家<sup>1)</sup>、既存住宅に LED を取り入れた尾山台の家<sup>1)</sup>、LED を用いた景観照明として女神大橋<sup>1)</sup>、グラントウキョウ<sup>1)</sup>、Think Park<sup>1)</sup>、オール LED による外構照明の街「Green Avenue あざぶの丘」<sup>2)</sup> などがある。このような導入事例の積み重ねが LED 照明をブレイクさせる引き金として期待されるのであるから、メーカーとしても、デザイナーの要望を取り入れるなど、お互いの協働が必要である。

最後に、人類は太古の昔から太陽の光で育ってきているので、燃焼による光源と同じ仲間である白熱電球は捨てがたいものがある。省エネに対して贅沢ではあるが、何が何でも all LED とせずに、適材適所で心地よい雰囲気を維持するということで、ぜひとも白熱電球を残しておいてもらいたいものである。

### 文 献

- 1) JLEDS シンポジウム 2008：地球環境保護への期待「いよいよやってきた LED 照明の時代」予稿集。
- 2) 落合 勉：省エネ環境共生の街づくりと 21 世紀型の照明。 [http://www.shopbiz.jp/contents/news.LF/50\\_058.phtml](http://www.shopbiz.jp/contents/news.LF/50_058.phtml)